

平成27年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成27年4月～平成28年3月

1. 学校概要

学校名 愛知教育大学附属岡崎中学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 高等学校 中高一貫教育
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他 ()

住所 〒444-0864
愛知県岡崎市明大寺町栗林1

E-mail : ms-ando@aecc.aichi-edu.ac.jp (本年度のみ)

Website : <http://blog2.oj.aichi-edu.ac.jp>

児童生徒数：男子 236 名 女子 238 名 合計 474 名
 児童・生徒の年齢 12 歳～ 15 歳

2. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ()

3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

○持続可能な社会を目ざす子どもを育てる日々の授業

1 私たちの願い

「持続可能な開発のための教育」のためには、

- ① 問題を見つけ出す力
- ② 問題の解決に向けて、自らの意志に基づいて行動する力
- ③ 自分の意見に偏らず、仲間と議論する力
- ④ 広い視野でよりよい方法を模索する力

が必要になる。これらのことと、根底である「よりよい社会を自分たちの手で実現したい」という夢をもつことで、子どもは「持続可能な開発」を現実のものとしていくと考える。

そのためには、知識偏重の教育ではなく、生活教育を基盤とした問題解決的学習過程による授業により、子どもの問題解決力を高めることが重要である。

本校では、すべての教科において、知識をつける時間と、生活教育を基盤とした問題解決的学習過程をバランスよくカリキュラムに組み込み、日々の教育活動をおこなっている。

2 授業実践（一部教科のみ抜粋。詳細は本校に直接お問い合わせください。）

<社会科>

植物工場に関する映像を見た後、工場で生産されたトマトを手にした子どもは、植物工場について詳しく知りたいと考え追究を始めた。植物工場が普及すれば、国内の食料自給率や輸出量を大幅に向上できるうえ、安心・安全な無農薬野菜を作れることがわかった。しかし、機械の故障などのリスクやコスト高など問題も多くあることがわかった。子どもは、植物工場の発展が日本の農業にどのような影響を及ぼし、日本の食料がどうなるかを知りたいと考え、追究を深めた。そして、企業や官公庁への取材により、植物工場と露地栽培の共存が大切であるという考えをもった。さらに意見交流を進める中で、子どもは、消費者が現代の農業の危機を知り、動き出すことで、未来の農業を守れると捉え始めた。そして、食料生産を持続して行うことができる未来の農業のあり方を考えなければならぬと考え始めた。

<理科>

片方はくさい臭いがするシューズ、もう片方は臭いがあまりしないシューズに出会った子どもは、シューズの臭いに関心をもち、シューズの臭いなくなる方法を考えた。そして、その原因を突き止める中で、シューズや足に菌がついていることを知り、シューズの臭いと菌との関係を調べ始めた。子どもは、温度、湿度、酸素の有無など、条件を変えながら、菌の増殖とシューズの臭いの関係を追究した。そして、臭いは菌自体が発しているものではなく、菌による分解で発生した化学物質であることが明らかになった。すると、シューズの臭いをなくすためには、殺菌をしなければならないが、至る所に存在する菌を殺菌してよいのか

と考え始め、菌と人間との関わりについて考え始めた。子どもは、枯れ葉や動物の死骸を菌が分解することだけでなく、発酵食品などについても追究した。特定の乳酸菌の入っているヨーグルトや乳酸飲料など、現在でも、菌に関する研究は進められている。医療の分野でも、新薬開発などの研究が行われている。そして、子どもは、人間が菌と共生することのすばらしさや大切さに気づき、更に豊かな社会を目ざし、新たな菌との関わりについて考え始めた。

<英語科>

ドラえもんから形を変えた Doraemon が、欧米で放送され注目されているというニュースを知った子どもは、なぜ注目されているのか不思議に思った。子どもは、日本のドラえもん和欧米の Doraemon の違いに目を向けた。すると、ドラえもんは内容を変えられて、欧米で放映されていることがわかった。子どもは、その国の文化や考え方などによって内容が変えられていることを知った。しかし、意見交流において、アジアでは、日本のドラえもんと同じような内容で放送されていることに気づき、アジアと日本のつながりに加え、世界の文化の多様性を感じた。更に、内容を変えてまで欧米で放送されていることから、Doraemon は世界で受け容れられるよさがあると考え、Doraemon をどう思うか外国の人に聞いてみたいと思い、国際交流協会などにいる海外の人たちと話をした。アジア、欧米と国によってアニメの注目する視点は違うが、Doraemon のポケットと道具には夢があり、共感されていることを知り、嬉しく感じた。そして、発想や知恵を生かし、アニメで外国の人に夢を伝えたことを誇りに思った子どもは、国際社会の中で、日本人の発想力や知恵を大切にしていこうと考え始めた。

○森林と共生する必要性を考え、森林との共生を実現することができるようにする自然体験活動

子どもは、日本の森林がほとんど人工林であり、整備が十分されていないため、森林が危機に瀕しているという事実を知った。さらに、富士山のふもとの天然林である樹海も、不法投棄などにより危機的な状況であるという事実を知った。子どもは、何度も学年討論会を開催し、「然 然るべき姿を取り戻すために」というテーマを決定し、1年生秋から2年生の自然体験活動に向けて準備を始めた。子どもは、自然を取り戻し、守るために何ができるのかを話し合った。さまざまな活動の中から、人工林を守るための間伐と、天然林を守るための清掃活動を行いたいと考えた。そのために、天然林がある富士のふもとで活動を行うことに決めた。子どもは、自然体験活動本番に向けて、追究を深めることにした。まず、森林や自然に詳しい方を学校にお招きし、話を伺った。さらに、プレ活動として地元の竹林で間伐の練習をした。こうして、自然体験に向け思いを高め、技術を身につけた。自然体験活動当日、追究により間伐の必要性を学んでいた子どもは、自分たちの手で自然を守りたいという強い気持ちをもって間伐に取り組んだ。子どもは、時間いっぱい仲間と協力しながら間伐を続けた。清掃活動では、土砂の中から次々ごみが出てきた。土砂の中でごみは地層となっており、絶えることなくごみが出続けた。深いところからは、40年以上前の瓶や缶も出てきた。その現状を目の当たりにし、身勝手な業者や大人たちの行動に憤りを感じた。この活動で、760kgを超えるごみを回収した。自然体験活動の最終日、全員で振り返りとなる討論会を行った。

